

る、所なり佛師定朝一刀三禮して地藏の尊像を彫刻し奉一千日を経聖容出生は座像の尊顔を成就すといへども持物の錫杖持たまふ事成就せざることを哀三宝に祈求したまふ所に或日の辰の一點より午のこく。に至て本尊の前後に霧ふかく降り降て異香四方に薫じ音楽幽なり聖衆の歌詠とぞ覺るところに午の申分に霧忽にはれて地藏を拜たてまつれば持物の錫杖をもち給ふなりぼさつの尊顔を見奉に生身の地藏のごとくなる「32ウ此尊像を今また江戸の感應寺におゐて洛陽の壬生の本体とすぐに拜奉錫杖寶珠もそのとほりにうつせる故なり

第廿七 地藏菩薩荒給事

江戸浅草に夢中居士とてすこしは禅法を聞いて禅浄土の出家と出逢て問話などしけるものなり此居士内々靈驗の貴地藏を安置せんと心がくるところに那須野に其姿も地藏尊と拜させたまふことは云傳るばかりなり。此地蔵を童ども馬の踏に乗て毎日とうづきして通り道に捨おくをその夜にぬすみとりて江戸に持かへりけるに旅宿にて毎夜地藏尊を入たる荷物を小者まぐらにいたすに夢に僧来て小者の枕を還けるよし語ければ夢中居士大に悦て江「33オ戸に飯佛檀にすへ香華燈明をそなへ尊敬仕奉るに夢中居士をも毎晩枕をかへしたまふゆへに檀那寺に寄進致けるに爰にても住僧の枕をかへし佛檀にて荒させ給ふゆへに夢中かたへ飯たてまつるゆへに是非なく本の那須野にかへしおくるなり此意趣を夢中有僧にかたりて地藏尊は道辻に在を悦たまふと見へたり御尊体を再興したてまつり朝夕馳走の供養は嫌たまひて人をなやまし荒させたまふや地藏の御心いかゞ兼たまはりたきと申僧答ていはく野僧も地藏尊を信心はすれども佛菩薩の御心は下として上ははかりがたし其上釈迦だにも地藏ぼさつの利益ハ無量劫にも不可説不可思議にして「33ウ説つくされぬとありさりながらも

一説一理を其方に語バ尤地藏尊を結構に再興して朝夕香花燈明珍物を備て禮拜尊敬を嚙汝は地藏の満足とおもはんが地藏尊ハさらにもつて本意にはあるまじきことなり元地藏尊ハ三界の衆生悉佛にならば後にぼさつの姿になりたまはんとのことなり又一切衆生を一人も漏さずたすけんとなれば汝は猶もつてたいせつなるべし其上無佛世界無縁の衆生までの利益なれば道辻を住家となし那須野は奥州の通道なれば人馬の往来昼夜たへず其中に多は佛の貴も法のありがたきこともしらする人行来に手足の塵ほこりをけわけ不善の輩万人の結縁は「34オ廣大の善根と地藏はおほしめすゆへに汝一人百味の供養にて尊敬ハ地藏満足なきゆへに荒たまふべし自餘のぼさつの慈悲だにも千人の衆生を助がために一人の衆生をころして万人をたすくるとあれば汝一人をなやましたまふなりことに往來の上下万民を助給ふハ地藏の大慈大悲にあらずやとかたりければ此時夢中居士自分の供養の旗竿をおるとなり

第廿八 大磯化地藏飛脚物語之事

扱世間のとり沙汰には大磯の石地藏は化させたまふと世間の人申なりこれは誠に地藏の化させ候や地藏尊ハ一切の善人悪人を二世ともに助給ふことなりその地藏の化て「34ウ人をなやませ給ふや佛ぼさつハ世界の化物を對治あるゆへにその名をかきつけ札守さへ化物は恐をなすことなり此義を變化自在となりまた維摩經などにも神通ハ慧をもつて愚癡の衆生を化すととなり宗鏡録にも若神變を具足せずんばなにをもつて摂化せんとなり身を六道に分て變化よろしきに隨て有流を度するとなりさて地藏經にも三界に有所四生五形變せずといふ所はなしとあれば天地の間の一切本來法身自體普種々の化をしらず見すそのうへに人間は自身の變化するこ

とを自身と見ずしらぬことは我身に生つきの目を「35才もつて我目を見ず餓鬼の目には水見ず人の目にハかせを見ぬに鬼神は目に風を見となり此ごとくに顯機顯應冥機冥應なれば人々の機見に隨ものなり地藏は閻王に化たまふ惣じて本来よりの化物をミナ人見こともおそろゝこともなくて中變よりの狐狸のばけ物ばかりを見ゆへに大礫の地藏も化たまふと見なり惣じて地藏の化たまふとは世界衆生の所見なり此ゆへに飛脚の見には地藏全ばけたまふべし此飛脚のものには化物と見させたまはねば地藏の結縁はなきゆへに御姿を飛脚の目には化て見させたまふことなり是逆そく是順といふ事なり

第廿九 五智堂造立之事」35ウ

扱諏訪淨光寺に五智の如来の造立は寺社新地奉行に窺五智の庵を結べくものなり五智に土佛の地藏千躰をたつことは地藏の身を千百億に分て娑婆世界の衆生五智の如来と地藏の授記方便に遇てながく苦をはなれんことを誓願せしものなり此五智堂の地ハ諏訪明神の前に山屋敷百二十坪の余淨光寺に寄進して社地の有までは此五智堂も退轉なきやうに定むることハ末代までの利益の爲也地藏堂にも土佛の阿弥陀千躰觀音千体勢至千躰釈迦千躰の造立は男女地藏巡に結縁のためなり此五智堂のまへに六地藏五智の願主の石塔もあるなり

第三十 佛像造立同寄進寺乃事」36オ

六地藏第四番此寺は空無居住の所にて卅五のぼさつ十三佛出山の釈迦牟尼如来聖德太子の尊像二尺五寸□觀音皆々御長一尺八寸宛に造立せしとなりしかりといへども未の十一月の累火にのこらず焼失せり誠に有漏の法はミなもつて此ごとくなり唯無為無漏の法を心に知べきことなり又東叡

山現龍院如来念佛堂に銅像阿弥陀の千体佛寄進せし所に寅の九月是も累焼せりまた銅像の一尺八寸の觀世音八躰東叡山千手觀音堂に寄進したてまつりてあるものなり又護持院には慧心の御作木像長五尺の正觀音また三尺三寸の正觀音二躰これも寄進し奉右の一躰をば弥勒寺へ護持院大僧正の「36ウ御寄進と聞また右の二躰の内天神切通の金性院に御寄進のよし聞及しに是も未の年に焼失せしとなり又豆州熱海淨土清嚴寺の閑居は増上寺大僧正貞譽上人の法縁あるゆへに銅像の御長八寸宛の百躰觀世音とまた一尺八寸木像の阿弥陀を契約せしがいまは在家にあるとなりまた元禄元年より長一寸の銅像宝永三年まで二萬の餘これを施土佛も一万躰の餘契約せしとなり夫谷中感應寺天台宗第四世蓮臺院の代に延壽堂念佛本尊三尺の阿弥陀如来を空無寄進せしものなり

六地藏造立の比前大納言入道藤原基賢卿の歌」37オ

おもひあまり曉ことになへて世の覚ぬ眠をあはれとやミる
道引と聞ぞうれしき杖のわのむつのちまたの塵のまよひも
かしこしな十のちかひも世を守名にくちせめやのりのことのは
恵なをわが藤原のとをつそのものすかたときくもたのものし
淺ましく罪ふかき身も身にかへて苦をすくふてうそれぞ妙なる
わけて世にほとこすめくミあふげとやひとつ心を六のすがたに
誓をくむつのすがたもあらかねの 僧 空無
つちゆたかなる御代の守に

巡六地藏慈悲利益記 終

松會三四郎板行 「37ウ

（白丁）裏表紙見返 「裏表紙

（せきぐち しずお 本学名誉教授）